

郷土館だより

Vol. V No.3

1983. 3. 31



人形もち (三四呂人形・野口三四郎作)

目次

年度末の感想と58年度事業予定について……………	1
東海道人力車の旅……………	2・3・4
青少年健全育成事業・少年教育推進事業……………	5
展示資料紹介・収集資料紹介……………	6
行事報告・おしらせ……………	7

年度末の感想と 58年度事業予定について

彼岸もすぎ、日毎に暖かさが増し、桜前線も間近、57年度が数日で終了しようとしている。

本年度は、テーマ展として「山本玄峰老師展」を開催したところ、予想以上の反響があった。また、テーマ展図録が好評で、初版の500部が早々に品切となり、開催期間中の予約を受付けた後、12月補正予算により、1,000部の増刷を行ったが、一週間程で売り切れてしまった。

龍沢寺の現任職鈴木宗忠老師さんを招き、玄峰老師についての講演会を実施した。(2日間)第二展示室を会場に、溢れる程の聴講者(狭隘だが)があり、講師は展示作品のエピソードや老師の遺徳を話され、作品の前で生前の師を偲び涙する場面もあった。

テーマ展の準備では——図録の写真撮影のため盛夏、締め切った部屋で照明用ライトを使用している仕事は、むし風呂の感があった。展示会場は、作品の掛軸(遺墨等)を掛けるのに、展示ケースの高さが足りず、休日出勤や残業の改装工事で、やっと開会式に間に合わせた。

本年度の郷土館は、「玄峰老師展」一色の感があり、少々反省をしている次第である。

さて、58年度の行事、事業予定については、次のように計画している。

(58年度 行事事業予定表)

区分	事業名	期日
展 示	テーマ展 「三四呂人形展」	10月7日～11月30日 (2ヵ月間)1階テーマ展会場
講 演 会	「三四呂人形と 野口三四郎について」	テーマ展期間中の日曜日(1日)
体 験 講 座	(1)草木染め (2)おかざり作り (3)年中行事	10月中旬～11月 12月初旬
青少年健全育成 (青少年地域活動)	(1)縄文土器作り (2)郷土館講座 (3)夏休み親子郷土学習	11月下旬～1月初旬(4日間) 8～11月 7月31日, 8月1, 2日
歴 史 探 訪	「史跡探訪」「博物館めぐり」	4～6月
調 査、研 究	(1)古老に聞く会 (2)古文書読習会	3月 毎月第2, 4土曜日
刊 行 物	(1)テーマ展図録 (2)勝俣文庫目録 (3)樋口本陣文書目録 (4)「ふるさと探訪」増刷 (5)郷土館だより	10月初旬 5月上旬 年3回
映 画 教 室	(1)春の映画教室 (2)夏の映画教室	4月初旬 7月下旬～8月初旬

○テーマ展「三四呂人形展」

市の文化財指定に向け、準備調査中である三四呂人形を、テーマ展にとりあげる。

三四呂人形は、わが三島の人形作家故野口三四郎氏の作品で、現在は遺作を複製した人形が、みやげ物として販売されている事で、よく知られている。(製造方法は、少々異なる)

和紙を張って作られた遺作人形は、素朴でほのぼのと、心やすらぐ作風であり、作者の人柄が作品によく現われている。

氏は、昭和11年第1回総合人形芸術展で人形芸術(院)賞を受賞され、今後の活躍が大いに期待されたが、翌12年2月、37才という若さでこの世を去った。このため遺作は少ないが、「水辺興談」「小守り」「忠犬ハチ公」「かげふみ」(以上郷土館だより表紙連載)「桃子」「里子」「夕立」等々が残った。

三四呂人形の展示は、「遺作展」が亡くなった年(12年4月)東京で、次が20余年前、当郷土館の前身ともいえる伊豆民俗資料館で開催された。

○歴史探訪

NHK大河ドラマで、ブームをよんでいる「徳川家康」のゆかりの地、浜松市周辺や岡崎市周辺の史跡探訪を予定している。

○青少年健全育成事業

中学生による校内暴力や非行化問題が、このところ連日マスコミににぎわしている。

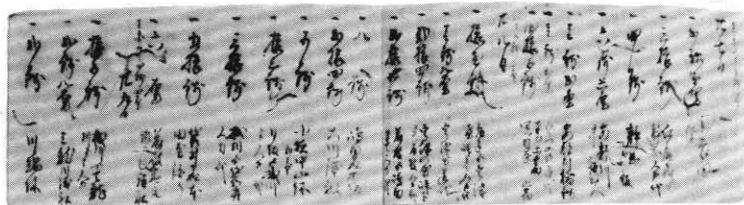
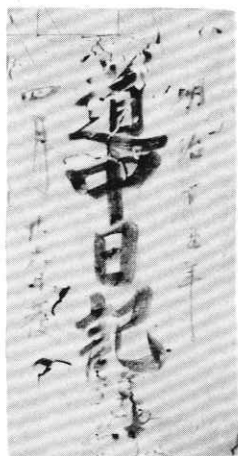
当市は、昨年9月「青少年健全育成都市宣言」を行い、文部省から「モデル都市」に指定され、家庭、学校、地域(行政)が三位一体となって、健全育成につとめている。

当館は、「縄文土器作り」等の青少年地域活動事業を通し、推進を図る。ただ、対象者が少ない(各中学5～6名で全体30余名)ため、この輪が広がる事を希求する。

●刊行物

三島俳諧三人名の一人といわれる滝ノ本連水(勝俣猶右衛門)の蔵書6,000冊の整理が済み、目録を作成し一般公開を図る。三島宿の本陣としてほう大な古文書が保存されている「樋口本陣資料」の目録作成。

事業計画の細部において、未定な部分もあるが、郷土館への関心と理解を深めていただくような事業内容としたい。(梅田館長)



東海道人力車の旅

明治10年、誓願寺住職だった田中和尚が、名古屋までの旅をした。もちろん汽車の走っていない時代の旅である。しかし、江戸の頃の旅と比べて変っている点は、宿々の間を人力車で行っているところだ。主要街道沿いにおける、当時の人力車の発達はかなりのものであったらしい。和尚の旅の目的は、道中日記からは明確には判らないが、人力車を利用しているところから、相当急いだ用向きがあったらしい。

往路、4月26日三島を立て、30日名古屋に着いている。4泊5日の旅である。名古屋1ヵ月滞在后、帰路は6月1日から4日までの3泊4日。想像以上に速い旅に驚かされる。

道中日記には、人力賃のほかに宿屋代、渡船賃、橋賃、休み賃が丹念に記されている。そこが興味をひかれるところだ。明治時代の物の値段等を考えながら、和尚の人力車の旅を追いかけてみよう。

道中、もっとも目立つ出費は人力車代である。名古屋までの片道5日間で、16回乗り継いで、合計3円67銭を費している。1回平均23銭になる。明治時代の汽車賃の資料があるので調べてみると、明治24年上野・青森間が開通して、その普通旅客運賃が3円64銭となっている。この値段と名古屋までの人力賃とほぼ同額である。こうした点からも、かなり割高な旅だったわけである。因みに明治10年の白米10kg当りの値段は、51銭。米だったら7石(70kg)買える。

中飯とあるのは、今で言えば昼食である。合計7回の中飯と1回のうどん代(580文)がある。1回当りの出費は約7銭となる。それにしても5日の旅で8回とは多い昼食の数である。1日2回

づつ食べた勘定となる。名古屋近くで食べたらうどんの払いが文というのもおもしろい。それにしてもほかには何を中飯としたのだろうか。明治値段資料によれば、明治10年東京では、もりそば一ぱいが8厘であった。もりそばの値に比べれば、7銭はごうせいな昼食である。因みにうな重は20銭の時代であった。

運賃として人力代のほかに、渡船賃、橋賃、道代等も加えなければならない。静岡県内の川に限って言えば、富士川・奥津川・大井川・瀬戸川・天龍川で渡船賃を払っている。たいてい3銭～5銭であるが、大川(大井川)だけは24銭とやたら高い。川の規模は他とそう変わらないのだが不思議である。越すに越されぬ大井川の名残りの船賃であろうか。変わったところの運賃として、丸子宿の向うの宇津谷の道代が1銭8厘ある。それにしても、前記した人力代と合わせて、こうした運賃も含めると、当時の旅はかなり高いものであったにちがいない。

こうして和尚の旅は、総費用17円78銭6厘と4貫400文で無事終わっている。この金額は白米10kg 51銭で割って計算してみると、白米なら330kg以上買える値段となる。現在の米の値段が10kg4,000円として換算してみれば、132,000円となる。

果してこの旅が高いものであったか否かは、当時の庶民の一般的な生活と比べなければ判らないことである。しかし現代感覚から言えば、名古屋滞在1ヵ月間でこの値段は安いように思える。おそらく、和尚は向うの知り合いの所に泊っていたのであろう。(次ページに解説)

参考資料

『明治10年道中日記簿』(郷土館3階展示資料)
『値段の風俗史』(朝日新聞社) (杉村)

廿九日

(X) 壹円九十四銭四厘

一、 拾五銭

一、 貳銭八厘

一、 貳銭

一、 拾五銭

一、 貳拾七銭

一、 五百文

一、 九銭

一、 拾八銭

一、 百文

一、 拾貳銭

一、 百文

一、 四拾六銭五厘

(X) 壹円五十四銭三厘

一、 三拾六銭

一、 三銭

一、 拾貳銭

M、 貳拾壹銭

一、 三拾銭

一、 貳銭五厘

一、 五百八十文(?)

一、 拾銭

(X) 壹円拾九銭三厘

X 金七円八銭五厘

名古屋滞在入用

迄人力代

掛川より袋井

人力代

袋井宿本

田屋泊り

藤枝宿元

瀬戸川渡船

掛川より天龍

川まで人力

天龍川渡船

川端休

天龍川より浜

松迄人力代

新所渡船

同所

菓子茶代

同所

中飯

新所よりニ

夕川(二川)迄人力

ニ夕川休

豊橋迄人力

豊橋休

豊川宿

三日

一、 三拾壹銭

一、 金貳拾銭

同

一、 貳銭五厘

一、 五銭

一、 貳銭四厘

一、 拾四銭

一、 拾貳銭

一、 壹銭貳厘

一、 壹銭

一、 拾六銭

一、 八厘

一、 三拾銭

一、 四銭

一、 拾六銭

一、 八厘

一、 三拾銭

一、 四銭

一、 拾四銭

一、 壹銭五厘

一、 貳銭五厘

一、 拾四銭

一、 拾銭

一、 六銭

日坂宿

川さちや宿

大川より

藤枝江人力

小夜中山休

金谷宿進物

大川渡賃

藤枝ヨリ

峠下まで

うつのや峠下

安部川人力

うつのや道

元瀬戸川

〇〇〇〇(不明)

安部川

静岡ヨリ

江尻宿江

休四兵衛

奥津宿

水口屋泊り

奥津川〇

浦豊橋改渡

倉沢休

藤原休

藤川渡

藤川より沼津

へ人力

元吉原甲州

にて中飯

沼津宿より

三島江人力

人足江

小遣相渡

土産物うち

八式十壹本

秋山藤七母

当主居料

() 内は解説者注

明治十五年(四)月 名古屋行(名古屋)

廿六日

- 一、金貳拾五銭
- 一、同 三銭
- 一、同 七銭
- 一、同 九厘
- 一、同 三銭九厘
- 一、同 貳拾七銭
- 一、同 三銭六厘
- 一、同 三銭
- 一、同 四拾五銭

- 沼津宿より元吉
- 原迄人力代
- 元吉原甲州屋
- にて中飯
- 藤川東両人
- 中飯代
- 元吉原渡船賃
- 富士川渡船賃
- 蒲原宿より倉
- 沢までの人力代
- 奥津川
- 渡船賃
- 倉沢○(虫喰い)
- 江尻宿大
- 竹屋止宿代

廿七日

- 一、(〆) 壹円五十銭四厘
- 一、貳銭五厘
- 一、三拾銭
- 一、四銭
- 一、六銭六厘
- 一、壹銭壹厘
- 一、壹銭貳厘
- 一、四拾五銭

- 〇吉田 休
- 江尻宿より
- 静岡人力代
- 静岡
- 中飯
- 安部川
- 安部川
- 中飯式人
- 安部川橋銭
- うつのや道代
- まりこ宿
- 四ツ目屋 止宿

廿八日

- 一、(〆) 八十九銭三厘
- 一、拾壹銭
- 一、貳拾四銭
- 一、貳拾七銭
- 一、八銭
- 一、貳拾四銭
- 一、五銭
- 一、拾三銭

- 丸子より宇津
- 屋峠まで人力代
- 宇津屋(谷)道代
- 宇津の屋峠下
- より藤枝人力代
- 藤枝より嶋田
- まで人力代
- 嶋田宿中飯
- 大川(大井川)渡船
- 小夜中山休
- 日坂より掛川

(左へ続く)

金六円貳歩

〇拾五銭

一、壹円七拾五銭

一、外二拾五銭

一、金 五拾銭

明治十五年六月一日 名古屋発足

六月一日

一、金四拾銭

一、壹銭

一、壹銭

一、九銭五厘

一、八銭

一、壹銭

一、拾貳銭

一、壹銭五厘

一、拾貳銭

一、七銭五厘

一、貳銭五厘

一、拾貳銭

一、拾八銭

一、拾五銭

一、八百四拾文

一、八百拾文

一、八百文

一、拾貳銭

一、三百文

- 〇〇直シ代
- 大平式ツ
- 駄賃
- 光明寺
- 類焼見舞

- 名古屋ヨリ
- 矢作へ人力車
- 背松休
- 大浜茶屋休
- 矢作中飯
- 岡崎より
- 藤川へ人力
- 藤川休
- 藤川より
- 赤坂人力
- 法蔵寺休
- 御油休
- 豊橋より
- 豊橋人力
- 豊橋ニ夕川
- 中休
- 豊橋より
- ニ夕川人力
- ニ夕川
- 岩田屋
- 山〇や
- ニ夕川より
- 新居江人力
- 新所ヨリ
- 入野江船賃
- 入野ヨリ
- 天龍川まで人力
- 天龍川
- 中飯
- 天龍橋賃
- 見附宿ヨリ
- 袋井人力
- 袋井ヨリ
- 掛川へ人力
- 休

(左へ続く)

青少年健全育成事業 少年教育推進事業(少年教室)

青少年問題はいつの時代にあっても論議を呼ぶ重要な問題である。特に今日のように学内暴力事件が頻発する異常な状態は、世間一般の人々にも深刻な問題として受けとめられている。

青少年は常に社会と接触しながら人格が形成されていくものである。このことは青少年の育成を担っている親を始め、教師、地域の人々を含めて全ての社会の人々が自分自身の問題として受けとめなければならないように思う。

先月もNHKテレビで「今、教育を考える」をテーマに県民参加の討論会が開かれたが、参加者の一人の精神科医は「子供の発達段階の中で、自然の発達を阻害する要因が多くなっている。例えば、第1反抗期、第2反抗期、第3反抗期があるが、幼児期の第1反抗期などでは、砂場で泥にまみれて遊び、広々とした所で飛び回ることによって攻撃的なものが昇華されていくのに、現代ではそうしたことを体験しないで過ごす例もある。また、小学校高学年の第2反抗期にあっては塾通いを強制され、やはり攻撃性の昇華がない。この為こうしたことを経験しない子供達、即ち攻撃性を上手に昇華する手段を知らない中学生が第3反抗期になって、幼児的な、また短絡的な形での攻撃性を示し、他に方法を知らないで暴力という形を顕わしていると思う。

若い教師も今の子供達と同じような過ごし方をした者が増えているので、教師と中学生の両方もが幼い者同士のような幼稚なぶつかり合いを示して、今日の状況を生んでいるのではないかと思う」と今日の状況を分析説明していた。

青少年が未来に向かって健全に成長していくことは、社会全体の願いである。このことの実現のためには青少年自身の努力はもちろんであるが、社会もこれに真剣になって取り組む時機に来ているのではないだろうか。家庭、学校、地域社会が連携して地域の教育機能を総合的に高める方策の検討を行い、青少年が未来に展望のもてる地域社会づくりを目ざしていかなければならないであろう。このような意味から、三島市は青少年健全育成都市宣言を昭和57年9月に行い、これについて具体的に取り組んでいる。

郷土館でも積極的に参加し、現在、青少年健全育成事業(国補助事業)と少年教育推進事業(県補助事業)の両事業を主催して、これらを通して

「豊かで健全な地域」づくり実現を目ざしている。

少年教育推進事業は昭和54年度から行い、健全育成事業は昭和57年度から行っている。この両事業とも中学生を主対象として事業展開を進めるものであり、今日ますますその重要度と期待度を増しているように思う。

これは体験学習に主眼を置いて、自分の体を動かす中から創造の喜びや発見への期待を見つけ出すものである。事業のひとつを例とするならば「縄文土器作り」の参加者の講座参加当初の目の輝きと、土器を野焼きから上げて完成品を見る目までの、その過程での大きな変化に驚かされる。

少年達は作り上げる喜びの中から何かをつかんでくれたものと思う。

昭和57年度は教員を対象とする指導者研修会(少年教育研修会)も開かれ、三島市からは下記の3人の先生方が参加された。

山田小学校 上原幸代先生
北上小学校 高田博子先生
北中学校 矢沢雅夫先生

今後の活躍が大いに期待されるものである。

社会教育機関のひとつとして博物館が行う事業は数多いが、青少年教育を直接に活動の範囲としている所は珍しいのではないだろうか。今後も博物館でなければできない特色を強く打ち出して地域社会に貢献したいものである。

(稲木)



「初午織り」も作りました



完成した土器に目を輝かす中学生達

■展示資料紹介■

関札

郷土館3階展示場西側に、厚手の板に文字が墨で書かれているものが展示されています。これを関札といいます。



関札

江戸時代、大名が旅先で泊まる宿を本陣といいますが、宿泊の前には多くは座敷割を添えて廻状をもって予約をしました。

大名の格式によって宿泊の状況は異なりますが、大大名クラスですと本陣の門と玄関にその家の定

紋を黒く染めた白麻の幕を張り、宿場の両端の入口と本陣の門前に関札を建て、この宿場に宿泊することを表示しました。

中大名クラスでは玄関に紫縮緬、門には麻幕を張り、門札は片札として宿へ入る方の口と門前の2ヶ所でした。

このように大体分けられますが、これにも各大名家の慣例があってかならずしも一定ではなかったようです。

関札は足利義満の時代から始まったといわれますが、宿場へ入る時の札は右側に建て、宿場の出口の方は左に建てるようになっていました。このように、門札の立つ位置によって、大名の行く方向を表わしたのです。このような関札は時代によりその大きさ、形状を多少変えています、大体幅1尺、長さ4尺ばかりの分厚の板に筆太に大名の氏名を書き込んでいました。これを1丈程の柱を付して建て、宿泊することを宿民や他の大名に表示したのです。(稲木)

■収集資料紹介■

寄贈資料報告 (花島家資料一若松町花島信之氏)

花島家からまとまった資料を寄贈していただいたので、今回の報告は「花島家資料」として一括御報告すると同時に、その主だったものの一部について説明申し上げます。

花島家文書の中には『伊豆鉄道株式会社設立請願書』がありました。現在の伊豆箱根鉄道の始まりとなる史料で、当時三島銀行の社主だった花島家が尽力し、計画作成した請願文書であり、当家ならではの史料と言えます。

キリスト教関係出版物は『旧約耶利米亜記』等明治初期のキリスト教出版物が44点ありました。花島兵右衛門翁が、初期キリスト者として、また三島を代表する知識人として活躍されたことが偲ばれる資料です。

花島兵右衛門はまた、彼の息子撤吉と共に、農業ことに牧畜に力を尽した人でした。乳牛の品種改良に努め、良い種牛を産したことは広く知られ、日本の牧畜に大きく貢献をしたのでした。農業関係書籍も貴重なものと言えるでしょう。

(杉村)

採集日	分類	資料	点数
58.2.9	花島家文書	○御用留(明治3.4年) ○伊豆鉄道株式会社設立請願書、外	30点
"	漢書	○史記評林 ○綱鑑易知録、外	258冊
"	キリスト教関係出版物	○旧約耶利米亜記(明17) ○福音新報29部、外	44点
"	英字出版物	○Lord Clive ○Now Selection Reader 外	17冊
"	和書	○春色梅ごよみ ○日光山志、外	46冊
"	農・商業衛生関係	○万国衛生年鑑 ○農談、外	71冊
"	教育関係出版物	○修学旅行の栞(垂中) ○高等小学習字本 外	27点
"	地図	○三島町地図 ○三島宿田畑郡村宅地 老分宅間縮図	5冊
"	写真	○海軍大演習写真帖 ○畜産写真	5冊 28枚
"	その他	○雑誌 中学世界 ○ " 東海之少年 外	55点
"	民具	○棒ばかり ○その他	未整理

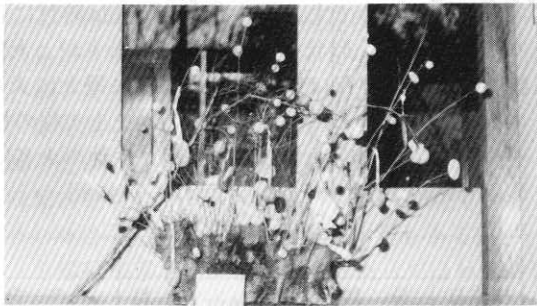
■行事報告■

～体験講座「まゆ玉作り」の報告～

正月に行なわれる年中行事は多くありますが、「まゆ玉作り」もそのひとつです。まゆ玉作りは一般に小正月の行事として行なわれ、ダンゴボクとかモチバナの異称でも知られています。

講座は1月9日(日)に、働く婦人の家調理室を会場として行ないました。講師には市内佐野の勝俣巖さんをお願いして、勝俣家で古くから作られているまゆ玉（勝俣家ではダンゴボクと呼んでいる）の作り方を御指導いただきました。

当日は親子の参加者29名の方が熱心に受講されました。



当日作られたマユ玉は郷土館玄関ロビーに飾られました。

★★★★★ おしらせ ★★★★★

■刊行物案内■

- 三島小誌(四)「戦国の争乱」…… (頒価) 700円
- 三島の昔話…… (頒価) 500円
- パンフレット「明治の三島」… (頒価) 200円
- パンフレット「みしまの道」… (頒価) 200円
- 絵葉書…… (頒価) 200円
- パンフレット「郷土の染と織」 (頒価) 100円
- しずおかの博物館…… (頒価) 800円

■編集後記■

古刹龍沢寺の一般参禅会に参加して3ヵ月が過ぎた。禅(ぜん)とは、梵語でdhyana禅那という。一般的には、心を静めることによって得られる高次の宗教的・内面的体験(坐禅)と理解されている。禅のあとに法話がある。老師の話の中に我と我が身を反省させられることが多い。と同時に生きる知恵と方便も教えてくださる。その中で「勇気、元気、根気の気を持って生きなさい。そうすればごまかしの多い現世、本物を見据えて生きられる」とおっしゃった。禅も仕事も「気ひとつだ」と思うこのごろである。(稲木)

～少年教室「楽寿園の植物」の報告～

青少年健全育成事業のひとつとして、郷土の貴重な文化遺産を学び、郷土を愛する心を養う中で青少年が健全に成長することを願って、「楽寿園の植物」講座を開催しました。

2月20日(日)の午後の講座であったが、参加した中学生30名は真剣に講師の説明に耳を傾けていた。講師には元教員の鈴木功先生をお願いした。

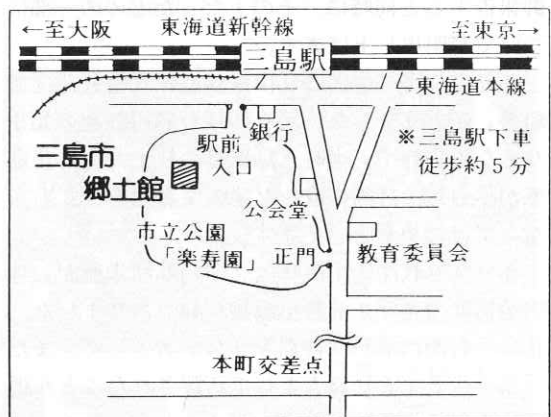
(稲木)



楽寿園内を巡りながら鈴木先生の説明を聞く中学生達

利用案内

- 休館日 毎月第1月曜・12月27日～1月2日
- 開館時間 午前9時～午後4時30分
- 入場無料 (但し、楽寿園入園の際、有料)



郷土館だより No.15
 昭和58年3月31日発行
 (年3回発行)

編集	三島市 郷土館
住所 〒411	三島市一番町19-3
	TEL.0559-71-8228
発行	三島市教育委員会